

未開野

すぐるの

6月号 (通巻802号)



力をこめて

小川玉泉

襟合はすさまの山巖笑ひをり
雨来ると剪るをだまきの濃紫
地境の石を掘り出づ蝶の昼
川波の高きに遊び残り鴨

雨に散り幹に貼り付く花の塵
花に酔ひ駅へと潜る二の鳥居
杖先に力をこめて仰ぐ花
花満ちぬ足萎えの身のいつまでぞ
山と谷彩る花や果ては海
目薬の一滴沁みぬ夕ざくら
堰を越えふたたび生るる花筏
吹雪く花乗せてきらめく細小川

木五倍子

松本三千夫

座に侍る男も和服針供養
鳥雲に潮騒からむ松林
母の忌の咲き極まれり白木蓮
一万歩あるけずじまひ蜆汁
日替はりの寒暖続く梅見月
亀鳴くや知恵熱の子のまた愚凶り
手水舎の水音かろし花馬酔木
城跡へ径の起伏や花木五倍子
土佐水木道は寺にて行き止まり
暖色のネクタイが好き街うらら
さくら散る基地の内外に拘はらず
春愁や鉛筆の芯また折れて

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

初音

安齋久英

巻尺の納まる音や冴返る
灯台の人語消したり春怒濤
初音聞く木木の葉擦れの背山より
太鼓橋余寒の風を吹き分けて
夫の魂辿り着きしや春の星
差し潮の波が波呼ぶ涅槃西風
おひねりの死語となりたり雛あられ
腹這ひて猫が獲物へ地虫出づ
耕人の一鍬ごとの退りかな
浮雲や岩場に温む忘れ潮

紙雛

大橋伊佐子

合格の電話遅きを詰りけり
本船に舳近づく臆かな
フェリー航く波間に春灯落しつつ
せせらぎの日毎高まる芽吹きかな
初蝶の幻のごと野に消ゆる
然りげなく病室に置く紙雛
共に嫁し幾星霜や古雛
春宵や花麩の浮かぶ清まし汁
ながらへて飽食の世の目刺食ぶ
気儘とは時にさびしや春炬燵



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句



名草の芽 堺 昌子

妣とゐるやう窓越しの春の月
茶話に笑ひ皺増え梅見茶屋
禅寺の屏のうち外梅の花
ひととせの過ぐる早さや名草の芽
空中のぶらんこ渡るピエロかな
サーカスの象と写真を春うらら
梅林や目白の影の池に揺れ

春疾風 熊切光子

すみれ野 鈴木一三

薄氷や波ひくやうに痛み去り
花ミモザ明るき声の美容室
金縷梅や裏の瀬音の高まり来
春疾風絵馬の白馬のをどり出で
いたどりを摘むや俄に山の雨
ゆつたりと尺余の真鯉柳の芽
強東風や鉛のごとき海の面

剪定の済みたる空の深きかな
露坐仏のまはり小暗き落椿
すみれ野に風の硬さの残りけり
診察に不安の椅子の余寒かな
観梅や八十路過ぎたる歩巾もて
校庭の上向く蛇口霾ぐもり
引鴨の気配の池のただならず

春炬燵

西川みほ

落椿

森清信子

怖づ怖づと身に添ふ歩幅深雪道
雪積みて刻失ひぬ花時計
豆撒や鬼役休む寺の裏
東京の雪積み列車みちのくへ
里山に日の凝る梅の白さかな
悩み事語るまで待ち春炬燵
青み来し寸土に春を疑はず

落の臺

森清

堯

梅日和

吉田きみえ

寒すずめ露仏の肩に手に膝に
交番の留守を明るくシクラメン
谷筋の風の素通り落の臺
瑠璃の羽池面を掠め風光る
まさなる空をひきしめ辛夷の芽
本陣の深井にこもる余寒かな
下校子の道草の畦犬ふぐり

裏山の杉百幹の寒気かな
戸を繰るや土盛り上ぐる別れ霜
春めくや日差しを背の針仕事
谷戸道の勾配ゆるし梅日和
宿り木の早く芽吹きぬ大櫓
茶毘の間も小鳥の声や芽吹山
梅を見て人の数見て疲れけり

青炎集

小川玉泉選



横浜 川村 亘子

千葉 岡井 マスミ

野の梅の堅き芽に雨やはらかに
唐突に病得し夜や寒の明く
ひとしきり舞舞うて消ゆたひら雪
春寒や雪載せて来し長き貨車
桜鯛焦げ加減良き化粧塩
小走りに戻る夜道や花辛夷

犬ふぐりいまだ解けざる山の黙
とつおいつ磴尽きにけり春の風
猫柳水面のきらを掬ひたる
梅東風や舳先ゆるがぬ舳ひ舟
檀林の名残りの門や梅ふむむ
春星のひとつ震へてをりにけり

横浜 加藤 八重子

横浜 有賀 鈴乃

ほつほつと咲き初む梅や雨静か
仏みな貧しく生きし彼岸くる
沈丁の香のほのぼのと朝日影
擦れ違ひざまに目の笑む大マスケ
春愁やひとり地球儀回しをり
苞はげて白木蓮の青き空

ひぎ丈の靴埋もれぬ樹氷林
古民家のたぎる鉄瓶風花す
高層のビルなき城下風花す
山すその落葉より生れ露の臺
プランターに張りたる水や菖蒲の芽
引鳥の群るる河口のきらめけり

横浜 上田 亮

小流れの程良きリズム芹育つ
料峭や大釜据ゑし通し土間
手入れ良き旧家の庭や梅二月
すれ違ふなぞえの小径梅祭
幾度も蒔く日確かめ種袋
粗大ごみに足踏みミシン春浅し

鎌倉 福田 房子

春泥に歩中戸惑ふ女靴
杖の身の遅れがちなる梅見かな
移植ごて入れ柔らかき春の土
鶯の初音や谷戸の大气澄む
知らぬ間に庭石の濡れ春時雨
春の野へ小犬の鎖解きにけり

横浜 和田 慈子

枯山に残る日の色峠越ゆ
裸木に羽音を残し何の鳥
林泉の浅き流れや薄氷
梅園や茅の屋根這ふ薄煙
草青む旅の終りの投句箱
譜面台並ぶ舞台の余寒かな

横浜 池谷 鹿次

早天の森より流る雉の声
灯ともしてにはかに暮るる梅の里
鋤返す土芳しき春田かな
肩馬の孫の軽さや風光る
神木の高きにつくり鴉の巢
山を越え霞にまぎる飛行船

大網白里 亀卦川 菊枝

梅東風や再入院の夫送る
山茱萸の花に屯の夕日かな
焼むすびの露味噌香るひとりの餉
啓蟄の庭を踏みしむ予後の夫
本流へ躍り込む川猫柳
白木蓮に息吹きかけてしまひけり

横浜 嵐 弥生

地吹雪に行く手閉ざされ里の道
水底に影置く鯉や水温む
物の芽の膨らむ園の日和かな
取ることもなく墓の立ち路の墓
春暁や妣に起さるる夢を見し
父母よりも長寿賜り菊根分け

耕 土 集

松本三千夫選



踏んまへて踏んまへて行く雪解道

小林 和世

木の芽どき腕まくりして硝子拭く
草餅や餡ほめ合ひて女たち

横浜 塩川 君子

早春やビルに囲まれ撫林

聞き役になりて持て成す花菜漬

二月尽緊張解けて小働き

咲き満ちて風に嵩張る雪柳

春寒や俄か参りの深大寺

取り敢へず靴を重石に花むしろ

洋館はレコードかけて花ミモザ

日脚伸ぶすきな事のみ遣るうちに

石田 朝子

日脚伸ぶ夕仕度をと鳩時計

この庭の幾星霜や匂草
人影の切れて梅林匂ひ立つ

三鷹 小林 清彦

歩きゆく携帯の声春うらら

頬を打つ風も和らぐ二月尽

花満開風出て空の動き出す

菜の花に釣られて巡る岬かな

抜け道のカレーの匂い春休み

菜の花や其は愛づるもの喰らふもの

見上げたる露座の大仏寒波来る

吉岡 孝子

あいさつの出来て三歳梅ふふむ

汁の実の手まり麩弾む雛まつり

横浜 荒井貞子

秒針と母の寝息と春の宵

彩りて雛となりぬ土人形

代々の雛並ぶや城下町

菜の花の揺るる車窓や鳶の舞
春めくや川辺に子らの声高し
枝垂梅の幹に風格確かなる